

ご招待状

早くも桜の咲き始める頃となりましたが、皆さまご健勝のことと存じます。

京都に縁の深い文化人である庭園作家の**重森三玲**の足跡と実績を描いた記録映画作品を生み出した、三玲の四男・**貝崙**（ばいろん）さんが、「石・砂・苔・水」を完成させた直後に他界されて1年が過ぎました。

この機にあたり、**重森貝崙**さんを追悼する企画として、次のような上映会を開催することとなりました。つきましては、京都の文化に深い関わりをお持ちの皆さまに、上映会のご案内を差し上げる次第に存じます。

とき●2023年4月22日（土） 午前9時40分～正午 〔開場＝9：30〕

ところ●京都キャンパスプラザ 【第3講義室】（京都駅より徒歩5分）

上映作品＝「永遠のモダンを庭園に～闇夜につぶてを投げる人～重森三玲」（2019年／59分）、

「石・砂・苔・水 ー重森三玲が描く禅とモダンー」（2022年／60分）

★ご希望の方は、お名前（1～2名）・ご所属（団体と部署）・ご連絡先（メール or ケータイ）をご記入の上、imagesatellite@hotmail.com へ4月8日（土）までに、お知らせください。

●当日は、本状を受付までご持参ください。

監督＝**重森貝崙**（ばいろん）（文化記録映画作家）

1938年京都市生まれ。1960年㈱岩波映画製作所入社。演出部に所属し、記録映画を演出する。代表作に「すいみんーREM睡眠をめぐって」、「中華人民共和国の農業」（1981年教育映画祭最優秀作品賞受賞）、「中国の食文化 五部作」「長江悠々」（1997年芸術文化振興基金助成）、「病む人なき未来へー大豆が救うアボリジニの生活習慣病」（2005年芸術文化振興基金助成）「乾貨の食文化」、「姑蘇繁華圖ー18世紀蘇州の光と影」など。

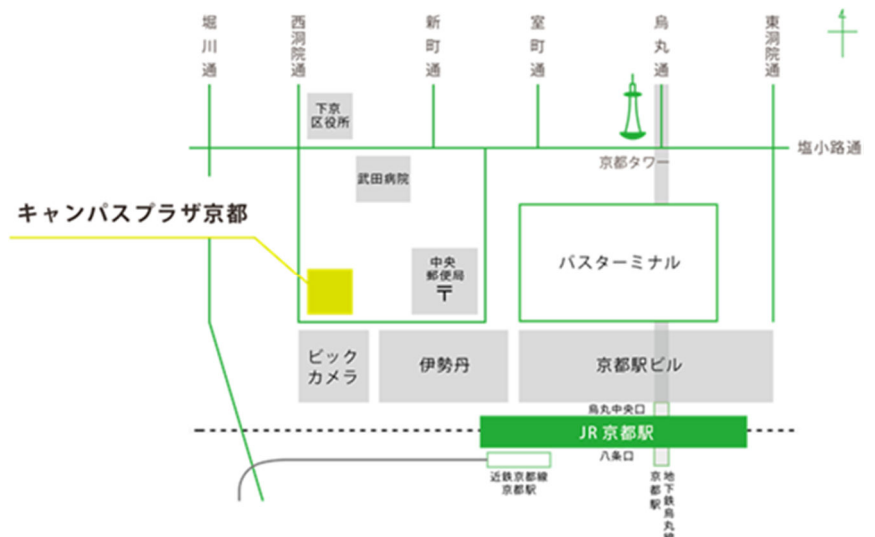
重森三玲の四男。2019年にプライベート・フィルム『永遠のモダンを庭園に～闇夜につぶてを投げる人～』（59分）を発表し、三玲の業績を改めて世に知らしめた。2022年4月4日に他界、享年84。

主催 有限会社 イメージ・サテライト

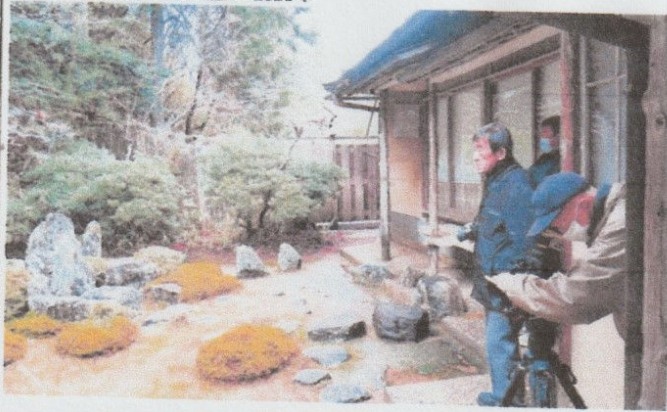
102-0074 千代田区九段南4-3-3-606

imagesatellite@hotmail.com

代表取締役・プロデューサー 中橋真紀人



和歌山県・高野山の西禅院にある三玲作の庭を口々に訪れた重森良嵩さん(左)＝2021年



▲重森三玲

右は、映画を作った三玲の四男の重森良嵩さん。兵庫県丹波篠山市の住吉神社にある三玲作の庭を訪れた＝2021年



京都府在住だった造園家・重森三玲(1896～1975年)は、東福寺本坊庭園(京都市東山区)や松屋土社庭園(四京区)で知られる。その足跡、各地で

作った庭をたどる2本の記録映画を、三玲の四男で映画作家の重森良嵩さん(東京都)が監督・脚本を手がけて作った。良嵩さんは映画完成直後の昨年4月に84歳で亡くなった。遺作となった2本の映画が今年4月22日、京都市内で上映される。三玲は岡山県出身。10代の頃から茶道や生け花を学び、1929(昭和4)年に京都に居を移した。記録映画は「永遠のモ

重森三玲の庭、四男が映画に

文化

ダンを庭園に」(2020年、59分)、と、「石・砂・苔・水」(22年、60分)の2本。良嵩さんは1960年に岩波映画製作所に入社し、記録映画を多く作った経験を持つ。三玲の記録映画では代表作の庭にとどまらず、父の歩んだ実像に迫ろうと、三玲の日記30冊をひもとして製作した。1作目の映画「永遠のモダン」を庭園に」では、日本画家を志して上京した三玲が20代の頃、文化全盛の学塾を東京で立ち上げたが、受講生が集まらなかつた若き日の挫折にも触れる。京都に移住後は、室戸台風で被害を受けた社寺の庭園修復を願い、全国250もの庭の実測調査を独力で始めた。そうした体験が生き、1939年に手がけた東福寺本坊庭園で日本庭園作家としてデビュー。「庭園に永遠のモダン」を追求した姿を追った。2作目の映画「石・砂・苔・水」は、三玲が手がけた全国約

足跡たどる記録2本、来月京で上映

50組を無料招待

重森三玲記録映画の上の映会はJR京都駅近くの都キャンパスプラザ京都(京都市下京区)で4月22日午前9時半～正午に開く。2本を連続上映する。50組100人を無料招待する。希望者は、はがきに郵便番号、住所、氏名(代表者)、年齢を記し、〒603-8216 京都市北区紫野門前町14 漆芸舎気付「重森三玲映画会」係まで。応募多数の時は抽選。当選者に4月10日ごろに入場券を送る。問い合わせはメールでimesate@hotmail.comへ。

300カ所の庭園のうち、兵庫県丹波市の石像寺、長野県木曾町の興禪寺など十数りの庭を紹介する。和歌山・高野山にある櫻池院の庭は、龍安寺(右京区)の庭を意識し、15個の石や白砂の調和を醸している。「伝統の基底部に軸足を置き、モダンを発現する」という三玲の作庭の特色が生き、「モダン龍安寺とも言える」と解説する。山口県周南市にある漢陽寺の庭は、枯山水の中に水路を作り、枯山水と曲水様式を融合させた珍しい構成になっている。三玲が最晩年に作った京都・松屋土社の庭の「さきがけになった庭」として紹介する。

借景を織っていた三玲が例外的に借景を採用した庭や、晩年になるほど庭の色使いが鮮やかになる三玲の作風の変化も見て取れる。1作目は京都市内の映画館で2020年に公開予定だったが、新型コロナウイルス禍のため上映が中止になっていた。1・2作とも京都では未公開だったため、良嵩さんの没後1年に合わせて有志が上映会を企画した。中橋真紀人プロデューサー(左)は「三玲のあまり知られていない人生や庭を知っていただく機会になれば」としている。(三好吉彦)